

外池 滋生 (2019 年度日本英語学会賞 (著書) 受賞)

この度は拙著『ミニマリスト日英語比較統語論』(開拓社 2019 年)に対して、栄誉ある日本英語学会賞(著書)を頂きまして、誠にありがとうございました。

この著書を執筆出版することができたことは「はしがき」に記しました通り実に多くの方々の支えがあったからですが、その中でも特に私の研究の集大成として単著として執筆することを強く勧めて、出版社との交渉までしてくださった野村忠央さん、さらに、編集段階において多大なる労力を割いてくださった江頭浩樹さん、高橋洋平さんに、そして何度にも及ぶ大幅改訂および章の追加などにも寛大に快く応じてくださった開拓社の川田優さんに、この場を借りて、心より御礼申し上げます。

また学会賞受賞に関しましては、内容を簡潔にまとめて推薦状を書いていただいた大石正幸さんと、拙著を詳しく読んでいただいた選考委員の方々に対しても心より御礼申し上げます。

拙著は、(1)基底構造においては日本語と英語が鏡像関係にあること、(2)代名詞と先行詞との間の、また関係節内部の空所と関係化された名詞句との間などの同一指示性は、移動によって生じた決定詞句のコピー間の同一性により捉えられること、(3)移動(=内部併合)は何らかの音形を伴わなければならないこと、従って LF 移動などのような非顕在的移動はあり得ないこと、(4)WH 疑問文/譲歩文に見られる WH 移動は、WH 演算子による演算子-変項構造を作るためではなく、TP が表す命題の集合を引数として取るための、音形のない選言関数/連言関数の移動に伴う音形の移動であること、(5)LF におけるコピー操作も、PF における削除操作も不要であること、(6)ラベル理論における「卓立した共有素性によるラベルづけ」など不要で、ラベル付け操作には意味と音形を伴う要素のみが見えるため、音形のみが移動する場合にはラベル付けに関与しないとするだけで必要なラベルが決定できる、等々という現在の標準的な想定に対する多くの挑戦を含んでいると自負しております。今回の受賞を機に、これらの論点に関する関心が高まり、日英語比較統語論および生成文法理論に関して賛否を問わず活発な議論が誘発されることになれば、これに勝る喜びはありません。